ひとすぢの道

田中道隆

孝養父母の道こそ、勵みたいものである。

◇

往古の父のために身をくだき、母がためにまことを致した幾多の人を思ふに、われこわか身に引き合せて、おのづからあついもの、流れる思ひがする。

「新人は親の心臓に刄を射す」と。

たとへ身のいかに果てやうとも、こんな言葉にならはうとは思はない。父のためになら、母のためになら、よし身を亡しても、ひたぶるにすぐなに、奉事したいものである。

父を語り、母を話す時に、私の心はわけなくも涙ぐむ。そしていつも、元政上人を思ひ、出雲崎の良寛禪師を浮べ、更に清水の愚庵和尚を慕ふ。

◇

元政上人は洛南深草の瑞光寺にあつた。そして霞谷の庵に唯父母孝養のためにのみ日暮した。上人が詩は、上人が生涯は、たゞ盡しても尚つくし終へぬ、父母への心づくしであつた。

上人は若き頃、誓つて

「父母の壽長ふして、我孝順を竭さん」

と。

母の在す間は、有馬温泉に遊び、光悅寺、大虛庵に棲つた上人は、而し決して、自れ安慰せんが爲に移り住つたのではなかつた。上人がこの思ひ立ちは、母に先つことを恐れた。ほんにそれがためばかりであつた。

吉野へも、身延山へも、お伴申し上げた母御は而も、古る年なみに、重つた病の、心の限りを盡したであらう元政上人がみとりにも報ひ給はず、寛文七年の冬、彼上人の父親と同じ八十七歳の天年を了へて失はれた。

さきだたば猶いかばかり悲しさのをくるゝ程はたぐひなけれど

いまはたゞ深草山にたつ雲をよはのけぶりのはてとこそみめ

いかにしていかにむくいん恨みなき空を仰ぎてねにはなく

ども

母の爲に生きた、彼上人が哀感、推し量るも愚かである。

「花月水雲は無用の用なり」

上人はかう言つて、しきりに保養をすゝめる、弟子の言葉もしりぞけられかくて、翌、寛文八年二月と言ふ、四十六の若きに示寂されて失つた。

冬深き宿にこりつむ山がつの、なげきのなかに年もくれけり

わしのやま常にすむてふみねの月かりにあらはれかりにかくれて

上人の歌集をひもごき、上人が詩に接する人は、いたましく上人の心を思つて、ほんに、涙ぐましうなるであらう。上人は作られたる詩人でもなく、作られたる歌人でもなかつた。上人の歌そのものは、上人その人の顯現であつた。上人が全的律動、それが上人の賦であり詠であつた。

昨夜三更夢　分明返深艸　夢覺久不寢
己寢不知曉　憶得母愛吾　未異在懷抱
一日不相見　如人喪至寶　我亦聞之佛
孝順爲至道　奉養二十年　我志尚未了
苦哉多病身　甚矣母之老　我心常多樂
思之樂也少　低頭掐念珠　擧頭送歸鳥

これにあたつて、誰か泣かぬものがあらうぞ。今こそほんとうのものに會ひ、今ぞ、ほんとうのものを示された思ひで一ぱいだ。

◇

夕ぐれに時雨にぬれて鳴くからすさむき今宵を宿なしにあはれ

人ならば笠きせましを夕鴉しぐれの雨にぬれつゝぞ行く

愚庵和尚は色のあせた黑衣を纏つてゐた。秋になつてまもないのに、最う東山の一帶は、すつかり紅葉して失つた。時じくに雨が降るので、庵の背戸の柿の實の赤くなつた事。

和尚は緣に腰を掛けて、ぢいゝつと、つながり下つてゐる柿を見てゐた。最う山は暮れる頃だ。ふと雨が降つて來た。驚いて和尚が見上げると、雨空に二羽の鴉が、あはれにも叫びながらかけてゆく。

「おゝ、可愛憎になあ、ふいの雨に沾れて——。」

和尚は靜かに眼をつむつた。

再び和尚が吾にかへつた時には、もう雨は降つてはゐない

そしてさつきの、鴉も空には見えない。

それでも和尚は直ぐに立たうとはしなかつた。

和尚は最うすつかり暮れて失つた古庵の縁にほんに默然として、動かなかつた。

愚庵和尚は、雨にぬれながら、宿なしに啼きつゝ空をかけるやうな、やる瀨ない心に生きた人であつた。

彼和尚は多くの歌を詠むでゐる。彼和尚は而も和尚獨自の歌を殘してゐる。

けれども私が和尚を懷ふのは、和尚が歌壇の新人、子規と結んで居たことでもなければ、と言つて、和尚の歌が、萬葉の堂奥に參じてゐた事でもない。

私は和尚を限りなく思ふ。それは和尚が、良寛禪師と同じやうに、元政上人と同じやうに、この一條のみちにつながるひたぶるの思慕者であつたことを思ふからである。

戊辰の亂に失つた、父母と妹との在處を求めて二十年、天田五郎は國を出て、放浪の身となつた。時に旅まはりの寫眞師となり、志士の食客となり、俠客の義子となり、東すれゞ西すれゞ、けれども父母の在處はわからなかつた。妹が行衛も知れなかつた。而も父母を思ひ想ふ心の、いかにしてうせやうぞ。

明治廿年の春、滴水禪師の下に走つて、實に居ながらにして、父に母に妹に、相まみえん道に入つた天田五郎こそ、我愚庵和尚その人ではあつた。

愛子われ巡り逢へりと父母のその手をとればゆめはさめにき

夢ならば繼ぎてみましとわがもへば 音のみ泣かれていねがてぬかも

夢！あゝ僅かに夢にのみ、父母に相ひ逢ふ術ののこされたる、せめてもと言へ、和尚の心はどんなであつたらう。元政和尚が結んだと同じやうに、夢こそ上人の唯一のこよないものだつたのだ。

夢ばかりをかしきものはなし。世になき父母をも目のあたりに見、へだゝりし友垣とも語らひ、まごろむひまに百年の事業をなし、頭には雪をいだきながら、幼き身にも立ちかへり、ありともきかぬ妖怪にも出會ひ、或は宙をとび空をかけるなど、つゆ思はぬことをさへ、ありゝとは夢なりけり。されば誠に夢ばかり不思議にをかしきはなし。若し夢てふ物のなからましかば、人は何へをたのみて世をやへぬべき。

和尚が記すところ、和尚が樣そのまゝである。「若し夢な

かりせば」と。此こそ和尚が眞實の體驗であらう。これこそ和尚が眞實の心のなかゆにじみでた、かすかにやるせない、魂のうつたへであつたらう。

ちゝのみの父に似たりと人がいひし我が眉の毛も白くなりにき

かぞふれば我も老ひたりは、そはの母の年より四こせ老ひたり

世をすてし我にはあれど病む時はなほ父母ぞ戀しかりけり

世の常のならはしに、うつり行く我が身の悟道に入つた彼和尚の心に、はらへどもはらへども、尚父母ぞ戀しかりけりの思ひは、たへなかつた。かくても遂に、生きのみの生けるかぎり、想ひ思ひつゝ、

大わだに島もあらなく梶緒たえたゞよふ舟のゆくへ知らずも

の一首を名殘に、五十一歳の春を向へた明治三十七年、一月十七日、伏見桃山は指月の杜の草の屋に笑ひながら去つて行つた。父と語り、母と相ひ逢はむ法悦にひたりながら、それこそ聖い、靜寂な遷化であつた事だらう。

良寛和尚は去り、元政上人はゆき、愚庵和尚も、亦去つて行つた。この一すぢのみちに立ち、このひとすぢのみちを歩みながら。

◇

相馬御風氏は、良寛和尚詩歌集の序のことばの中に言つて、

思ふに彼くらゐ淋しく且清い心を以て、彼くらゐ淳眞な幼なさを以て、ほがらかに、かゝはりなく自然を愛慕し、人間を愛慕し遂げた人は、極めて少ない事であらう。而てさうした極めて稀有な自然の愛慕、人間の愛慕の表現であればこそ、私達には良寛和尚の詩歌が、又なく貴く懷しいものに思はれるのである。

と。

良寛禪師程、親しみに滿ちた、ほがらかに、みづ〳〵しい人はない。禪師ほど、こゝから、人間を愛し、自然を愛した人はないだらう。

肉親に對し、肉弟に向つたと同じ愛を、彼は一切の人に向つて及ぼしてゐる。人ばかりではなく、空をゆく鳥に、道のべにをき忘れた鉢の木に、彼はわけもなく、寛かな、熱い愛の手をさし伸べてゐる。

たらちねの母がみ國と朝ゆふに佐渡がしまべをうち見つるかな

足乳根の母のかたみと朝夕に佐渡の島根をうち見つるかな

いにしへにかはらぬものはありそみの向ひに見ゆる佐渡が島なり

おもかけの夢に見ゆるかとすればさながら人の世にこそありけれ

◇

あゝ、いまにして思へば、眞實元政上人が、良寛禪師が、愚庵和尚があとに、旅立つ事は、私の生涯の勤めであつた。この道に精進する事は、唯一つ私に示された、明かな道であつた。

而もこのみちこそ、行きやすく、行きがたいみちである。僅にまれに、ますら男の行きし道、而もそのあせにけむ、古道こそ、永久の灯てらすみちであつたことを。

◇

ちゝはゝのめぐみもふかき粉河寺ほこけのちかひたのもしのみや

近頃私は、この一首を暇にまかせて歌ふ。そしてほんとうに、あふれる温味にひたりながら、初めてしつくり味ふ事が出來たやうに思つてゐる。

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。